

アタシは二代目グラントリノ

ag260

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グラントリノの孫娘が祖父を超えるヒーローを目指すお話。

目次

1 : 目指せヒーロー	1
2 : 個性把握テスト	8
3 : 戦闘訓練	17
3. 5 : 幕間	30
4 : USSJ 強襲	43
5 : USSJ 強襲 (2)	53

1：目指せヒーロー

つい最近、受験という学生にとっての一大イベントを終えたアタシこと『飛風とひかぜ 空音そらね』は自宅で悠々と惰眠をむさぼっていた。

「Z！Z！Z！」

『おい！空音！起きとるか！』

「Z！Z——むにや？」

そんな中、アタシの部屋のドアをけたたましく叩く音で夢の世界から現実を引き戻される。

「んんん？おじいちゃん？」

寝ぼけまなこをこすりながらドアを開けると、そこには予想通りおじいちゃんが立っていた。

「空音、やっと起きたか。お前宛に届いてたぞ」

「アタシに？」

そういつておじいちゃんが差し出してきたのはやや大きめの封筒。

その表面には雄英高校の文字が記されていた。

「もしかして、受験の結果通知表!？」

「多分な。ほれ、さっさと受け取れ」

アタシは差し出されたそれをひったくる様に受け取る。

「もう中身見た!？」

「人の手紙を見るほど耄碌してるように見えるか？」

「全然！ありがとうおじいちゃん！」

アタシは受け取ったそれを抱え、自室に戻りドアを乱暴に閉めた。

「まったく…。落ち着きのないのは誰に似たんだか」

部屋に戻って机に座りながら、おじいちゃんから受け取った封筒を緊張しつつ見つめて数分。

「よし！女は度胸！」

意を決して封筒を開けると、勢いが付きすぎていたのか中に入っていた小さな機械が机の上に放り出された。

『私が！投映された!!』

「きゃっ!?オ、オールナイト!？」

放り出された際にスイッチが入ってしまったのか、いきなり映し出されたN01ヒーローとその音声に思わず声を上げる。

『いきなり私が映し出されて驚いているかね？実は来年度から雄英に勤めることになったんだよ！』

「オールマイトが雄英の先生!？」

これには驚いた。

オールマイトと言えば『平和の象徴』とも呼ばれる生きる伝説だ。そんな人物から直接教えを受けるなんて幸運はそうそうない。

『コホン。私の話は置いて、飛風少女！筆記、実技ともに高得点だ！実技に至っては敵Pが50点に加え、秘密にされてた審査制の救助活動Pが27点で77点！もう1人の少年と同率だが入試トップで合格だ！』

「入試トップ…」

『個性の使い方も実によかった。映像で見せてもらったが、まるであの人を——』

「ん？」

投影機の調子が悪いのか、若干映像がと言うよりオールマイト自身が小刻みにブレ始めた。

アタシの気のせいか、顔色も悪くなっている気がする。

『シンツ！さて気を取り直して！来いよ飛風少女！雄英が君のヒーローアカデミアだ』

オールマイトの力強い呼びかけと共に、投影機が役目を終えて映像が消える。

そして——

「やっつったああああああ!!」

あふれ出る喜びをそのままに、アタシは歓声を上げながらおじいちゃんがいるリビングに駆け降りた。

「やったよおじいちゃん！」

椅子に座ってアタシの好物でもあるたい焼きを食べようとしているおじいちゃんの小さな体を持ち上げ、そのままぐるぐると回りだす。

「アタシ雄英に合格してたよ！」

「おお、やったじゃねえか」

「入試トップだって！」

「分かった分かった。アツアツたいを食べながら聞いてやるからまずは下ろせ」

「個性の使い方もよかつたって褒められた！」

「分かったから…」

「アハハハハ！」

「いい加減下ろせ！」

「痛い!？」

くるくると陽気に回っていたアタシの頭におじいちゃんの容赦ないチョップが落とされた。

「何すんの!？」

「はしやぎ過ぎだバカ孫。雄英に合格したからってヒーローになれるわけじゃねえんだぞ」

「むうう…」

おじいちゃんの言葉にアタシは唖ることしかできなかった。

事実、雄英に入学できたからってヒーローになれるわけではなく、スタートラインに立っただけに過ぎないからだ。

…それでも。

「…もうちょっと喜んでくれると思ったのに」

「…はあ。お前が合格ることなんざ分かり切ったことだったのに、そんな大げさに喜ぶかよ」

「え?」

「誰がお前を扱ってやったと思ってるんだ?お前ほどの実力で受からねえはずはねえよ」

そう言うてにやりと笑うおじいちゃん。

じゃあ、おじいちゃんはアタシが雄英に合格するって最初から信じてたってこと?」

「…まあ、入試1位で合格は上出来だ。今日は獅子屋のたい焼きでも買ってやる」

「もお、おじいちゃん大好き！」

「まったく…。現金な奴め」

「早く行こー！獅子屋のたい焼き美味しいからすぐ売り切れちゃうよー！」

「落ち着け！そんな格好で外に出るつもりか？」

おじいちゃんにそう言われ自分の格好を見返して、昨夜から変わっていない寝間着姿のままだったことを思い出した。

「あはは…。着替えてきまーす！」

「…ヒーローになるならそのせつかちな性格はどうにかせんとな」

後ろから聞こえるため息交じりの言葉を聞き流しながら、部屋へ駆け戻る。

おじいちゃんの御小言は長いからね。

獅子屋のたい焼きが売り切れちゃうよ。

「おじいちゃん、お待たせ！」

「おう。じゃあ行くか」

服を着替え、ヒーロー事務所も兼ねた自宅から目的のお店に向かって意気揚々と出かける。

少しして獅子屋のある繁華街までたどり着くと、パトロールをしている何人かのヒーローとすれ違った。

すれ違ったヒーローたちは学生などから呼び掛けられれば笑顔で手を振り返し、中にはサインまでする人もいる。

「ねえ、おじいちゃん」

「なんだ？」

「おじいちゃんもプロヒーローなんだよね？」

「今更何を」

そう、アタシのおじいちゃんはこう見えても現役のプロヒーローなのだ。

「でも、アタシおじいちゃんがヒーロー活動してるの見たこと無いんだけど」

アタシのその言葉におじいちゃんは一瞬きよんとするが、すぐに表情を崩して笑い始めた。

道ですれ違う人たちが驚いてアタシたちの方を振り返るのが
ちよつと恥ずかしい。

「今はたくさんの若いヒーローがいるからな。こんな爺が汗水流す必
要もないんだよ」

「…おじいちゃんはそのでいいの？おじいちゃんの実力ならもつと有
名になれるし、ビルボードチャートの上位にも——」

「良いんだよ。俺が隠居出来てんのは平和な証拠だからな」

そういうおじいちゃんの声色はとても穏やかで、それ以上アタシは
何も言えなくなった。

「…そっか。なら仕方ないね。後はアタシに任せてよ」

「後はって何がだ？」

「こつちの話！ほら、獅子屋着いたよ！アタシ餡子とカスタードと抹
茶のたい焼きね！」

アタシがそう言うと、訝しげだったおじいちゃん表情が次第に呆
れたもの変わる。

「3つも食うのか？てか、カスタードと抹茶つてなあ。たい焼きと
言ったら餡子だろ」

「ええ？カスタードも抹茶も美味しいよ？おじいちゃんも食べてみ
なつて！」

「そんな食えるか。お前の一口分けてくれ」
「しようがないなあ」

そんなのんびりとした会話をしながら、たい焼きを買い終えたアタ
シ達は帰路に就いた。

ちなみにたい焼きはとっても美味しかったよ！

おじいちゃんもカスタードと抹茶を食べてみたら意外と美味し
かったって！

その後は雄英に入学するための準備や、家から出て1人暮らしのた
めの部屋選びに家財道具の購入、わずかにできた暇もおじいちゃんに
『体が鈍るといけないから』と訓練を付けられ、入学前の休みは飛ぶよ
うに過ぎていった。

そして――

「忘れ物はねえな？」

「うん、大丈夫！大体の荷物は先に向こうへ送っちゃったし！」

「…そうか」

雄英高校入学式の少し前。

アタシは上京の準備を終え、新幹線のある駅前に見送りに来てくれたおじいちゃんと共に居た。

「あいつらはこんな日にも帰ってこれねえのか」

「お父さんとお母さんの事？仕方ないよ。大事なお仕事だもん」

アタシは眉根を寄せるおじいちゃんに努めて明るい声で言った。

まあ、ちよつと寂しいのは確かだけど、ちゃんとお祝いと激励の手紙はもらったしね。

「じゃあ、そろそろ電車の時間だし行くね」

「ああ、ちよつと待て。雄英でオールマイトにあつたらこれ渡してくれ」

アタシを呼び止めておじいちゃんが差し出したのは1通の手紙。

「これをオールマイトにつて、おじいちゃん知り合いなの!？」

「古い知り合いつてとこだ。頼んだぞ」

あのオールマイトとおじいちゃんが知り合いだったことに驚きつつ手紙を受け取つた。

「勝手に中身見るなよ？」

「み、見ないよ!？」

すごい気になるけど、さすがに人の手紙は見ないよ！

「じゃ、じゃあ今度こそ行くね！体育祭テレビで見てね。絶対活躍するから！」

気まずさを無理やり抑え、荷物を持ち直して改札へ向かう。

「おいー！」

「おじいちゃん？」

改札を潜ろうとした時、急におじいちゃんから呼び掛けを受けて振り返る。

「――誰だ君は!？」

「——っ」

とぼけた表情でそう言うおじいちゃんに一瞬だけ驚いたけど、アタシはすぐにその意図を察した。

そして、満面の笑みと大きな声で宣言する。

「アタシはスーパーヒーロー！二代目グラントリノだよ!!」

アタシの宣言を聞いたおじいちゃんは最初はポカンとしていたが、しばらくすると目尻に涙を溜めるほど大きく笑い出した。

「は、はは、ハハハハハ！そうか、そうか！その名前が似合うよう頑張ってくださいよ！」

「行ってきます！」

そうして、大きな声で笑うおじいちゃんに見送られながらアタシは改札を潜った。

目指すはおじいちゃんを超える最高のヒーロー！

飛風空音、全力で行きます！

2：個性把握テスト

「それじゃ、行ってきます」

雄英高校から電車で数駅離れた、住宅街の一人暮らしには十分な広さを持ったアパート。

雄英に通うために一人暮らしを始めたアタシは、出掛けの言葉に対して返事がないことに若干の寂しさを感じながら家を出た。

「あら、空音ちゃんおはよう」

「大家さん！おはようございます！」

アパートを出たところで会ったのはこのアパートの大家さんであるお婆さん。

アタシが雄英に通うために一人暮らしを始めたとは知ったら、夕飯のおかずとかを分けてくれるようになった優しい大家さんなんだ。

「今日から学校かい？」

「はい、今日が入学式なんです！」

そう、今日からとうとうアタシの高校生活が始まる。

そのせいで昨日は興奮でなかなか寝付けなかったほどだ。

おじいちゃんに知られたらまた小言を貰いそうだけどね。

「じゃあ、大家さん。行ってきます！」

「気を付けてね」

大家さんに手を振りつつ、駅に向かって歩き出す。

電車に揺られること二十分弱、最寄り駅についてから少し歩くと大きな雄英の校舎が見えてきた。

「入試のときも思ったけど、やっぱり大きいなあ」

校門前から校舎を見上げる。

「ここが日本最高峰のヒーロー育成校か…。」

「よし！気合入れていくよ！」



「一年A組…。ここか」

自分の教室の前にたどり着いたアタシは少し緊張しながらドアに手をかけた。

「お、おはよー」

恐る恐るといった風になっちゃったけど挨拶しながらドアを開けると、すでに教室に居にいた数人の生徒の視線が一斉にこっちに向いた。

せ、せめて何か反応してよ！

そんなアタシの内心を読み取ってくれたのか、ピンク色の髪と肌が特徴的な女の子が笑顔で話しかけに来てくれた。

「おはよー！私、あしと 芦戸 みな 三奈！女の子同士よろしくね！」

「三奈ちゃんね。アタシは飛風 空音！こっちこそよろしく！」

元氣いっぱいな三奈ちゃんについてアタシもはしゃぐ様に自己紹介を返してしまった。

むむむ。なんだか三奈ちゃんとはすごい気が合う感じがするかも！

「でも良かったー。ヒーロー科って女子少なさそうだったから不安だったんだよねー」

「アタシもー！」

「すげえな女子は。もう打ち解けたのかよ」

アタシが三奈ちゃんと話していると、赤い髪を逆立てた男子生徒が話しかけてきた。

「俺はきりしま 切島 えいじろう 鋭児郎！よろしくな！」

「切島と私は同中なんだよ！」

「アタシは飛風 空音。よろしくね切島君！」

入学早々出来た友人と話していると、その後も続々と人が教室に入ってくる。

女子や数人の男子生徒との自己紹介を終えて、そろそろ時間になろうかという時

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

ドア付近からそんな場の空気を凍らす声が聞こえてきた。

…え？誰あの寝袋の人？

切島君と三奈ちゃんも突然現れたその人に呆然としている。

「ハイ、静かになるまで八秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね」

なんか、集会で先生が言いそうなこと言い始めたんだけど。

「担任の相澤あいざわ 消太しょうただ。よろしくね」

まさかの担任!?

「早速だが体操服こくろふく着てグラウンドに出ろ」

アタシやほかのみんなが驚きで固まっていると、相澤先生は雄英の体操服を取り出し差し出す。

そして用件だけ言うと、さっさと教室を出て行ってしまった。

「…とりあえず女子は更衣室行こっか」

呆気にとられたアタシたちは、とりあえず先生の言う通り着替えるために更衣室へ向かう。

「それにしても体操服に着替えて何するのかな?」

「うーん、入学式にこの格好で出るってことはないと思うけど…」

体操服に着替えながら三奈ちゃんとこれからのことを話すが、さっぱり分かんないや。

「体操服でグラウンドってことはレクリエーションか何かじゃないかな?」

「ああ、ありえそうだね」

「もしくはまた入学試験みたいなことやらされるとか?」

「ええー。さすがにそれはないでしょ」

まあ、アタシも言ってるそれはないって思ったけどね。

さすがに入学初日に抜き打ちでそんなことしないでしょ。

「ま、行けば分かるか」

「そうだね。ここで考えてても仕方ないって!」

着替えを終えてグラウンドに出るとすでに相澤先生が待つており、アタシたちは少し急いで先生の前に整列する。

「集まったな。今から個性把握テストを行う」

「」「個性把握テストオ!?!」「」

フラグ回収早いよお。

入学式をすっ飛ばして行うテストにはほぼ全員が驚きの声を上げた。騒ぐ女子もいたが、先生はその意見をそんな悠長な暇はないと封殺する。

そして説明されたのは個性解禁での体力テスト。

デモンストレーションで爆豪と呼ばれたつんつん頭の男子生徒が、個性を使ってソフトボール投げをするように指示される。

「死ねえ!!」

え?なに今の掛け声…。

ヒーローを目指すものとは思えない掛け声とおそらく爆豪君の個性である爆発とともに投げられたボールはぐんぐんと距離を伸ばしていく。

「まずは自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を作る合理的手段だ」

そう言って先生が持っていた端末の画面を見せると、そこには『705.2m』と先ほどのソフトボール投げの記録が表示されていた。

「す、すげえええ!」

「700越えてマジかよ!」

「個性思いつき使っていいなんて面白そー!」

「さすがヒーロー科!」

表示された記録にアタシを含めみんなが歓声をあげると、相澤先生の眼差しに剣呑な光が帯びた。

…なんかマズい感じになっちゃったかな?

「…面白そうか。ヒーローになるための三年間をそんな腹積もりで過ごすつもりか?」

「…え?」

「よし、トータル成績が最下位の者は見込みなしとして除籍処分しよう」

「」「ええええええええ!」「」「」

う、嘘お!?

こんな所で除籍処分なんて食らったらおじいちゃんになんて言われるか。

そ、想像しただけでも恐ろしい！

「最下位が除籍って、理不尽すぎる！」

「まだ初日ですよ!?!」

「敵、災害、大事故。そういう理^{ピンチ}不尽を乗り越えてのヒーローだ」

生徒たちから非難の声が上がるが、相澤先生は顔色一つ変えずに淡々と告げる。

「Plus ^{向こうへ} Ultra」さ。さあ、乗り越えて見せろ」

相澤先生の意志が曲がらないと分かるとみんなの表情がグツと真剣なものになる。

でも何やら一人、顔色を真っ青にしたもさもさ髪の男子がいるけどどうしたんだろ？

「では、50メートル走から二人ずつ測定する。呼ばれた奴から用意しろ」

おっと、ほかの人に気を取られてる場合じゃないな。

まずは自分のことに集中しないとね。

「次、常闇と飛風。用意しろ」

次がアタシの番。

今までの人たちで最高タイムは眼鏡をかけた飯田って男子で3.04秒か。

すごい記録だけど、この競技じゃ負けれないんだよね！

『ヨイ』

測定機械から声が聞こえるとアタシは大きく息を吸った。

『START!』

そしてスタートの合図と同時に吸った空気を勢いよく足の裏から噴射する。

反動によって前に飛び出したアタシの体はすさまじい勢いで50メートルを飛び抜けた。

『2. 14秒!』

やった、良いタイム！

「すごい！今のが空音の個性!?!」

アタシの測定が終わると三奈ちゃんが興奮した様子で詰め寄って

きた。

「そうだよ。アタシの個性は『ジェット』！足の裏から吸った空気を出して高速移動できるの！」

「おお。カッコいいね！」

「へへ、ありがと！」

第二種目は握力測定。

ここではアタシの個性を活かせないから普通に測って43キロ。

まあ、おじいちゃんに鍛えさせられたからこのくらいはね。

第三種目は立ち幅跳び。

これはアタシの個性がぴったりだね！

最初のジャンプと同時に個性を発動。

文字通り一飛びする。

記録は54メートル。

第四種目は反復横跳び。

これは個性を弱めて使い、少しだけ体を加速させる。

記録は55回。弱めで使つてるとは言え、連続使用はちよつと辛いかな。

そして第五種目のソフトボール投げ。

ここはちよつと工夫してみた。

助走距離をとれるならまだしも、円の中から単純に投げるんじやアタシの個性はあんまり使えない。

だから、空気の噴射で勢いをつけた足で思いっきり蹴り上げる！

豪快に蹴り飛ばしたボールは手で投げるよりも断然強い勢いで吹き飛んでいった。

記録は316メートル。

五種目を終えて良い記録が残せたおかげで少し周りを見渡す余裕ができた。

一呼吸おいてほかの人たちの測定を眺めると、ちよつとさつき顔色が悪かった男子の番だった。

うーん、最初見た時よりも顔色が悪いな。

それによく見てなかったから分かんないけど、今までの記録も特にパツとしないものだったような。

もしかしたら、体調が悪いのだろうか？

だとしたら相澤先生に行ってあげたほうが——いや、あの先生じゃ『健康管理はヒーローの基本だ』とか言いそう。

そんなことを考えながら緑谷と呼ばれた男子を見ると、なにやら覚悟を決めた様子で腕を振りかぶった。

しかし、投げられたボールは力なく飛ぶだけで記録は46メートル。

でも、投げた本人もその様子に驚いてる？

「抹消ヒーロー、イレイザー・ヘッドー」

呆然としていた緑谷君と先生が何か喋っていると、突然そう大声を上げた。

イレイザー・ヘッド？

聞き覚えはないけど、それが先生のヒーロー名かな？

周りのざわめきを聞くに、どうやらアングラ系のヒーローで個性を消す個性を持っているらしい。

そんな先生と再び何回か会話をして、緑谷君が二投目の準備に入っ

た。
下を向いてぶつぶつと何か呟いていると思ったら、最初のやけくその覚悟が決まった表情とは違い、意志のこもった表情で腕を振りかぶる。

そして、空気の壁をぶち抜くような音と共にボールは天高く飛んで行った。

多分、アタシの記録の倍以上は飛んだかな。

その様子に目を見開いて驚いていた先生に、緑谷君は拳を握りこんで何かを宣言している。

よく見ると人差し指が内出血で変色してる？

思いつく理由としては個性の反動？

あの様子を見るに骨折してる。

おそらくだけど、個性を使うとその反動で体が壊れちゃうのかな。

でも、だとしたら指一本での記録ってことだよね…。
なんてパワー。まるでオールマイト並みだよ。

そんな緑谷君に驚きと戦慄を覚えつつも、測定は続いた。
長座体前屈と上体起こしは個性が活かせないから、平均的な記録。
持久走は走る種目には自信があつたけど、飯田君とポニーテールと
一部が凶悪な八百万やおよろず百ちゃんももに負けてしまい三位だった。
百ちゃん、スクーターは卑怯だよ…。

そして、全種目終了後。

「んじや、パパつと結果発表」

相澤先生の言葉と共に場に緊張が走る。

なにせこの発表で一人は確実に除籍されてしまうのだから。

アタシはそこそこの成績を残せたから上位に入つてるとは思っ
ど、透明人間な葉隠はかくれ透ちゃんとわるや背のひと際低い男子、それに緑谷君
は成績が良くなかったのか顔色が悪い。(透ちゃんは見えな
いけど)「ちなみに除籍はウソな」

皆が固唾を飲んで発表を待つなか、相澤先生は今日最大級の爆弾を
落とした。

「「「はーはーはー!?!」」」

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

「当たり前じゃないですか。あんな嘘、ちよつと考えればわかりますわ」

おお、さすが百ちゃん。アタシはすっかり騙されてたよ。

「そゆこと。これにて終わりだ。教室にカリキュラム等の書類がある
から目を通しておくように」

そう言うのと先生は踵を返して、さつさと校舎に戻って行く。

こうしてアタシの雄英入学初日は幕を閉じた。

「ただいまー」

家に帰り、慣れない一人暮らしに四苦八苦しながら夕食と入浴を終
え、布団に寝っ転がる。

横になって考えるのは今日の個性把握テストの順位だ。

全体でアタシは四位だった。

測定種目向きの個性かどうかって言う点もあると思うけど、アタシ

より上位の三人はそれを抜きにしても凄かった。

一位の百ちやんと二位の轟君は推薦入学者みたいだし、三位だった爆豪君はアタシと同率の入試トップ。

アタシは中学卒業までおじいちゃんに訓練をつけてもらっていた。

同じ中学のヒーロー志望の子たちと比べて、自慢みたいになっちゃうけどアタシはレベルが違った。

でも、雄英で初めて出会ったアタシと同等以上の同世代。

不覚にも少しワクワクしてる。

「…明日が楽しみだなあ」

眠気に身を任せて目を閉じながら、明日から始まるヒーロー科特有の授業のヒーロー基礎学に思いをはせる。

どんな内容なのかは分からないけど、他の人と競い合えるのが楽しみでしようがないよ。

3：戦闘訓練

雄英入学二日目。

ヒーロー科と言っても常に訓練のような授業をしているわけでもなく、午前中は普通の高校生のように一般科目の勉強もしている。そんな午前の授業を終えての午後の授業。

普通の高校ならばお昼ご飯の後の授業ということでも面倒だったり、眠気が襲い掛かってきたりと嫌がられる時間かもしれないが、雄英ヒーロー科では、アタシはもちろんクラス全員がそれぞれとした様子で授業の開始を待っていた。

なぜなら――

「わーたーしーが!!普通にドアから来た!!」

No.1ヒーローのオールマイトが教壇に立つ授業だからね!

「オールマイトだ!」

「本当に先生やってるんだ!」

「銀時代のコスチューム!」

「が、画風が違いすぎて鳥肌が…」

オールマイトの登場に教室内が一気に喧騒に包まれた。

「早速だが、今日はコレ!戦闘訓練だ!」

教室内の喧騒が収まる間もなく『BATTLE』と書かれたプレート掲げながらオールマイトが宣言する。

いきなり戦闘訓練!

これはテンション上がるよ!

「そしてそいつに伴って、入学前に送ってもらった個性届と要望にそってあつらえたこれ!」

そう言つてオールマイトが壁にリモコンらしきものを向けてボタンを押すと、壁がせり出してきてその中の収納スペースが露わとなつた。

「戦闘服だ!」

「「「おお!」」」

コスチュームの登場に教室内の喧騒が最高潮になる。

切島君なんかは椅子から立ち上がって歓声を上げてるほどだ。

「着替えたら順次グラウンドβに集合だ」

「二はい！」

オールマイトの言葉にテンションの上がっているクラス中が元気
のいい返事を返す。

「三奈ちゃん！早く行こー！」

「うんー！いこいこー！」

かく言うアタシもテンションが上がりっぱなしで、同じく興奮した
様子の三奈ちゃんを急かして更衣室に向かった。

「おおー」

更衣室に入りコスチュームが入ったトランクを開けると、中にはア
タシが考えたデザインとおりのコスチュームが入っていた。

鼻から下を覆うマスク。

硬いナツクルガードのついたグローブ。

空気抵抗を考えたピッタリとしたブーツ。

要望どおりの機能が付いたゴツめのブーツ。

そしてたなびくマント。

グラントリノ、おじいちゃんをモチーフにしたデザインだ。

「空音のコスチュームカッコいいね！」

我慢できないとばかりに早速コスチューム着替え、着心地を確かめ
ていると先に着替え終わっていた三奈ちゃんがアタシのコスチ
ュームを褒めてくれた。

「ありがとー！三奈ちゃんのコスチュームもカッコいいね！」

「でしよー！」

三奈ちゃんのコスチュームはまだら模様のコンビネゾンにフ
ァー付きのベストで結構胸元の開いたセクシー系。

「お、二人のコスチュームもいいね」

「…透ちゃん？」

透ちゃんに声を掛けられてそちらに振り向くと、そこには手袋のみ
が宙に浮いていた。

「…それコスチューム？」

「そうだよ?」

唾然とした三奈ちゃんの問いにあっけらかんと答える透ちゃん。

いや、透明人間としては正しいかもしれないけど女の子的にはアウトだよ!?

「す、すごいコスチューム…だね?」

「えへへ、ありがとー!」

「あ、ははは」

そんなこんなで若干気まずい雰囲気のまま着替え終わったアタシたちはグラウンドβに向かった。

「さあ、始めようか!有精卵ども!戦闘訓練のお時間だ!」

グラウンドに全員が揃うとオールマイトが授業の開始を宣言する。

けど『有精卵』かあ…。

なんかおじいちゃんみたいない言い回しだな。

そんなことを考えてるとオールマイトと目が合った。

「むっ!?!」

目が合ったオールマイトはアタシの姿を見ると少し目を見開いて驚いた後、すぐに視線を外してしまった。

な、なんだろ今の。

アタシの格好に可笑しなところがあつたかな?

アタシが自分のコスチュームを見直している間に、今回の授業の説明がされる。

簡単に言えばヒーローチームと敵^{ヴァイラン}チームに分かれた二対二の屋内

戦。

勝敗は制限時間内に敵^{ヴァイラン}を捕まえるか核に触れるかでヒーローの勝ち。

敵^{ヴァイラン}は制限時間まで核を守るか、ヒーローを捕まえたら勝ち。

チーム決めのおくじの結果、アタシのペアはなんと三奈ちゃんになった!

一番仲のいい三奈ちゃんと組めるなんて幸先いいね!

「それじゃあ最初の組み合わせを決めるぞ!最初の対戦はこいつらだ!」

オールマイトが箱の中から引き抜いたボールに書かれてた番号はAとD。

つまり、ヒーローチームが緑谷君とお茶子ちゃんウイランで敵チームが爆豪君と飯田君か。

「ほかの子たちは地下のモニタールームで見学だ！」

出番の生徒たちだけを残し、ほかの生徒はオールマイトに先導されビルの地下室に向かう。

「よし！それでは戦闘訓練開始！」

オールマイトの合図とともにヒーローチームが動き出し、ついに戦闘訓練が始まった。



訓練が始まって数分、爆豪君が奇襲をかけた後に緑谷君と一対一の勝負になった。

緑谷君と爆豪君の声は聞こえないが、傍から見ていて確かに熱い勝負をしていると思う。

現に切島君や三奈ちゃんはモニターに釘付けだし。

でも、アタシはみんなほど熱中できなかつた。

だってこれ、喧嘩じゃない？

アタシと同じ入試一位と聞いてた分、余計に期待との落差が大きい。

確かに個性の使いかたとかは純粹にすごいと思う。

けど、感情に任せたまま動く姿を見てるとどうにも拍子抜けしちゃう。

こつそりため息をついて周りを見渡せば、百ちゃんともう一人の推薦入学者の轟とじょうき 焦凍君しやうとうが周りから一步引いたようにモニターを見ていた。

あの二人もアタシと同じように感じたのかな？

そうして最初の組がヒーローチームの勝利で終わり、講評の時間。講評では百ちゃんが周りを静かにさせるほどズバズバと意見を

言った。

見てみればオールマイトも若干、苦笑いしてる。多分、言いたいこと全部言われたとか思ってるっぽい？

最初のビルは緑谷君と爆豪君の大規模攻撃でダメージが大きかったため、別のビルに移動しての第二戦目。

ついにアタシの出番が来た！

アタシは敵チーム。

そして相手は轟君と両肩から二対の触手が特徴的な障子しょうじ目蔵君めぞうだ。

推薦入学者が相手か…不足無しだね！

「よおーし！早速作戦会議だ！」

「お、三奈ちゃんやる気満々だね！」

「もちろん！——で、作戦会議って何すればいいのかな？」

「み、三奈ちゃん…」

「てへへへ」

後頭部を掻きながら笑う三奈ちゃん。

むう…。かわいいから許す！

「まあ、まずは相手の個性把握かな？」

「個性かあ。轟は氷の個性っぽいよね。昨日のテストでも氷使ってたし」

「でも、測定後にその氷溶かしてたから炎も使えるはずだよ。見てた感じ右が氷で左が炎かな」

「うーん。氷だけだったら私と相性いいのになあ」

そう呟く三奈ちゃん。

確かに氷だけだったら三奈ちゃんの酸で溶かせるんだよね。

「障子君はあの触手だよね」

「昨日のテストでも握力すごかったよ」

「さつき先端から口が生えて喋ってたから、多分体のパーツを出せるんだと思うけど…」

うーん。轟君も障子君もまだほとんど会話したことないから、全然情報が分かんないや。

「まあ、相手の対策ができないならこっちの得意を押し付けようか」
「こっちの得意？」

アタシの言葉に三奈ちゃんが首をかしげる。

「そう。まず三奈ちゃんは遠距離の手段がない障子君相手なら有利に立ち回れるはず」

「おお、確かに！」

「だからアタシが轟君を押しさえるから、その隙に三奈ちゃんが障子君を倒す。そしてその後二人掛かりで轟君を倒すって感じかな」

アタシが推薦入学者の轟君と戦ってみたいって願望込みだけど、作戦自体は間違っていないよね。

「でも、それじゃあ空音の負担が大きくない？」

「大丈夫！アタシ室内戦は大得意だから！」

不安そうな顔をする三奈ちゃんに自信満々の笑顔とサムズアップを見せる。

フフフ。

おじいちゃんに仕込まれたアタシの戦闘技術をとくと見せてあげよう！

『そろそろ時間だ。両チームとも準備はいいかな？』

そうしているうちに無線機から時間の経過を知らせるオールマイトの声が聞こえてきた。

「じゃあ三奈ちゃん。アタシは個性で下の階を飛び回って斥候してくるよ」

「うん、気を付けてね。相手を見つけたら連絡頂戴ね」

「了解！」

『それでは戦闘訓練開始！』

よおし！行くぞ！

訓練開始と同時にアタシは個性を使って核を置いた五階から高速で下の階まで移動する。

まずは索敵と奇襲かな。

アタシの速度なら一撃与えた後に離脱するのは難しくない。

ヒット&アウェイを繰り返して、相手に奇襲を警戒させて時間を潰

させる。

「…ん？」

そんなことを考えながら、二階まで移動していると何やら違和感を感じた。

…なんかヒンヤリしてきた？

そう思った次の瞬間――

「――っ!？」

アタシのいたフロア、いやビル全体が凍り付いた。

「な、まさか轟君の!？」

『えええ!?!ナニコレ!?!』

いきなりの事態に驚いてると無線機から三奈ちゃんの悲鳴が聞こえた。

『そ、空音?!いったい何が起きてるの!?!』

「多分轟君の個性!でも、ここまでの広範囲を一気に凍らせられるなんて…」

運よく個性を使って空中にいたから良かったものの、床に足をついていたら凍っちゃってたよ。

氷の厚さによるけどアタシの個性で碎けるかわかんないもんね。

「三奈ちゃんは大丈夫?」

『な、何とか。足が凍り付いちゃったけど酸で溶かせたし。寒い以外は大丈夫かな』

良かった。

運の部分もあったけど、今の攻撃でこっちの行動不能者はゼロ。

そして相手は不意打ちの大技で仕留めたと思ってるはず。

「出鼻はくじかれたけど、今度はこっちの番だよ」

気を取り直して下の階を目指し、移動を始める。

辺りを警戒しながら移動していると、部屋の奥に目立つ紅白色の髪が見えた。

「…見つけた」

『二人とも見つけた?』

アタシが小声でつぶやくと、三奈ちゃんも声を潜めて返してくる。

「いや、轟君だけで障子君は確認できないや」

『…別行動中かな?』

「…いや」

どうやらあつちはアタシたちを仕留めたと思っているのか、遠目で見ても大して警戒した様子もなく上に向かって歩いてる。

「多分、さっきの凍結攻撃でアタシたちを仕留めたと思ってるみたい。おそらく障子君はまだビルの外に居るんじゃないかな」

『…ほんとだ。障子君見えたよ』

三奈ちゃんが窓からこっそり覗いたのか、ビルの外で障子君は待機しているらしい。

まったく…舐めてもらっちゃ困るよ!

「アタシはこれから轟君に奇襲をかけるね。三奈ちゃんは障子君に注意してて」

『わかった』

アタシは三奈ちゃんとの通信を終えると、とどろきへん目標目掛けて確保テープを手に一気に個性で加速する。

「っ!」

「——惜しいっ」

確保テープを巻きつける寸前、轟君はこちらに気づいて体をひねる様にアタシをかわした。

「…最初の一撃じゃ仕留めきれなかったのか」

「ふふん。油断大敵だよ」

「チツ」

アタシの華麗なるドヤ顔に轟君は悔し気に舌打ちを返しながらこちらに向かって氷を出してくる。

でも、正面からならアタシの個性で見てから避けれる。

「行くよー」

氷を避けた後、個性を全開で発動させて部屋の中をスーパードールが跳ねるように縦横無尽に飛び回る。

これぞおじいちゃん直伝、名付けて『スーパードール超跳人!』

「そろそろそろそろー」

「くっ！」

部屋中を飛び回りながら拳や足で攻撃を加えていくが、急所はしっかりとガードされてしまう。

けど、今回の勝利条件は倒すだけじゃないんだよね！

「そこー！」

「させねえー！」

ガードで上げている左腕に確保テープを巻きつけようとしたけど、眼前に氷壁を出されて思わず後退する。

「ふう。危ない危ない——ん？」

氷を避けて一息ついてとき、ふと疑問を感じた。

さっきの反撃、なんで炎じゃなくて氷を使ったんだろう？

アタシが狙った左腕なら炎を出したほうが簡単に防げたはずなんだけど…。

手抜き？

でも轟君を見れば視線を鋭くしてこちらを見据えている。その様子に手抜きや手加減は見られない。

「おっと！」

そんなことを考えていたら、轟君がこちらに氷を向けてきていた。

迫る氷を飛んで避け、また疑問が浮かび上がった。

氷の勢いが弱くなってる？

そもそも、ビルごと凍らせられるんならこの部屋ぐらい氷で一気に埋めれるはず。

それをやらない理由があるはず…。

…お？

よく見たら轟君の体に霜が降りてる？

まさか…。

「この辺でいったん引かせてもらおうかな」

「…なに？」

「じゃ、そういう事で。奇襲には気をつけなよ轟君」

「待て！」

フハハハ。

待てと言われて待つ女はいないのさ！

背後から氷が迫ってくるがそれを振り切り、部屋から離脱する。

「ふう…っと、もう大丈夫かな」

轟君と戦った部屋から十分な距離を取り、追ってこないことを確認してから三奈ちゃんに連絡を入れる。

「三奈ちゃん。今大丈夫？」

『…今、障子とにらみ合ってるよ』

「そっか、じゃあそのまま聞いて。轟君と戦って分かったけど、多分轟君は持久戦に弱い」

おそらく氷の個性で体も冷えちゃうんだ。

でも、冷えなら左の炎で解消できると思うんだけどなぜかそれをしてない。

個性把握テストで使ってるのを見たから、使えないわけではないはず。

それにあのコスチューム。

まるで左半身を隠すようなデザイン。

理由は分からないけど、轟君はあまり炎を使いたくはないみたい。

「だから作戦の大筋は変えないけど、相手を倒すんじゃないやなくて時間制限まで粘る方向に変えよ。倒せそうならそれでいいけど、無理はしないだね」

『了解。そっちもね』

短いやり取りで通信を終えると、轟君を探しに移動を始める。

移動を始めてしばらくすると、三階で轟君を見つけた。

「どうやら奇襲を警戒して、周囲を注意しながらゆつくりと進んでいたいみたい。」

「っ！」

「…見つかっちゃったか」

また奇襲を仕掛けようと思ったけど、今度は先に見つかっちゃった。

「もうあんまり余裕もねえ。一気に仕留めさせてもらおうぜ」
余裕がないか。

それは訓練の残り時間なのか、それとも轟君の個性の事なのかどっちだろうね？

「つれないなあ。こんな美少女が相手してあげるのに」

「悪いな」

轟君はアタシの軽口に簡素に返すと、こちらに氷を出してきた。

「って、威力上がってる!？」

「わあ!？」

何とか氷を避けるが、轟君は次々と追撃を仕掛ける。

時間がたつたから回復した!？」

「だけど、万全ではないはず！」

事実、部屋を覆うほどの凍結攻撃は出してない。

「アタシもやられっぱなしじゃないよー！」

個性を発動させ、部屋中を縦横無尽に駆け回る。

「チッー」

轟君は氷壁を出してアタシを止めようとするが、その氷壁すらも足場に変えてさらに不規則に飛び回る。

「ほらほらーこのままじゃさつきと同じ——っ!？」

「それはさつき見たからな。二度目はねえよ」

アタシの行く先を遮るように氷壁が張られたから、飛ぶ軌道を変えようとして気づいた。

まるでアタシを挟み込むように氷の氷壁ができ、左右の逃げ道が潰されていることに。

…もしかしなくても誘導された？

「これで終いだ」

逃げ道のないアタシに向かって勢いよく氷が迫る。

「けど」

「なめるなああああ!!」

迫りくる氷に向かって個性で勢いを増した蹴りを叩き込み、粉碎する。

うなれアタシの乙女力（脚）！

「…悪あがきだ」

「簡単にあきらめらるなっておじいちゃんに鍛えられたもんでね！」

一度氷は砕いたけど、その後からも続々と氷が押し寄せる。

押し寄せる氷に負けじと蹴り碎いていくが――。

ぐぬぬ…。

さすがにこれ以上は無理かつ。

「くっ！」

疲労がたまり、動きが鈍ったところを氷に足を捕らわれてしまった。

「…俺の勝ちだな」

動けなくなつたアタシを見て轟君はそう宣言する。

「…うん、悔しいけどここはアタシの負けかな。でもアタシ達の勝ちだよ」

「なに？」

アタシの言葉に轟君が眉根を寄せる。

その瞬間

『タイムアップ時間切れだ！ 敵 チームWIN！』

『ヤッターアアアア！』

無線機を通してオールマイトと三奈ちゃんの歓声が聞こえてきた。

「ね？ 言ったでしょ」

「…次は負けねえ」

「アタシこそ次は完全勝利するからね」

そう言うと轟君は踵を返してビルを下りて行く。

こうして、初めての戦闘訓練は終了した。

てか、轟君!?
氷溶かしてくれませんかねええええええ!?

3. 5 : 幕間

今日は私の初授業の日！

しかも担当するクラスは私の後継者でもある緑谷少年の在籍する一年A組。

これはカッコいい姿を見せなければと意気込みながらコスチュームに着替えるように指示を出し、グラウンドβで生徒たちを待っていた。

しばらくしてコスチュームに着替え終えた生徒たちがグラウンドへ集まる。

真新しいコスチュームで身を包み、興奮した様子で周りの子たちと喋る姿を見て私も同様だったなと今は遠い過去に想いを馳せた。

：いかんいかん。

生徒たちを前に物思いに耽るとは、私も歳をとったな。

「むっ!?!」

気を取り直して生徒たちに視線を戻せば、どこか見覚えのあるコスチュームに思わず声が出してしまった。

あ、あのコスチューム！

デザインに多少の違いはあるがあれは間違いなく恩師グラントリノのコスチュームに違いない！

ぐ、偶然か？

いや、着ているのは飛風少女だ。

彼女の個性はグラントリノと同じようなものだったはず。

まさか、あの方の血縁者!?

過去の胃液で酸っぱい思い出が蘇り、足が情けなく震えそうになるのを全力で堪えていると、私のことを不思議そうに見る飛風少女と目があつた。

不審に思われるのはマズいと思い、すぐに視線を外して心を落ち着かせる。

大丈夫、大丈夫だオールマイト！

まずは授業に集中しよう！



緑谷少年と爆豪少年の訓練が終わった。

初めてヒーローになること以外で緑谷少年が見せた激情。

止めたくないと思ってしまうが、教師としてなら有無を言わず止めるべきだったか…。

だが、落ち込んでも居られない。まだ授業は始まったばかりなのだから。

気を取り直して始めた第二戦目は轟少年と障子少年のヒーローチーム、飛風少女と芦戸少女の敵^{サイラン}チームの対戦だ。

「轟と飛風か…。轟は推薦組だし、飛風は爆豪と同率の入試1位。実力者同士の戦いだな！」

モニタールームにいる生徒たちがワクワクとした目でモニターを見つめる。

…飛風少女か。

入試での動きを見せてもらったが、彼女は強い。彼女ならば轟少年ともいい勝負をするだろう。

そして、モニターの中では早速轟少年が仕掛けた。

なんと広範囲の凍結攻撃でビルを丸ごと凍らせたのだ。

「仲間を巻き込まず核兵器にもダメージを与えず、尚且つ敵の弱体化！」

「最強じゃねえか！」

なんとという冷気…。

ビルだけではなく私たちのいる地下のモニタールームまで、まるで冷凍庫のように極寒の地に変わってしまった。

生徒たちはあまりの寒さに歯を鳴らしながら身を縮こませる。

これは、勝負ありか？

そう思い、モニターで飛風少女と芦戸少女の様子を見れば、飛風少女は空中で凍結をかわし、芦戸少女は足元の氷を酸で溶かしていた。

「おお!? 敵^{サイラン}チームは二人とも無事だぜ!？」

「轟さんと障子さんは気づいていませんわね」

八百万少女の言う通り、轟少年はさっきの攻撃で決まったと思い込んでいるのか悠々とビルの中を歩いている。

障子少年も個性を解除し、外で見ているだけだ。

そうしている内に飛風少女が轟少年に奇襲を仕掛け、そのまま戦闘に突入した。

「ウウツ!？」

飛風少女の戦闘を見て思わずうめき声が漏れる。

あ、あの高速戦闘術は間違いなくグラントリノ!

彼女との間柄は分からないが、間違いなく関係者!

sh it! 震えるな、この脚め!

「あ、あのオールマイト?大丈夫ですか、何だか震えてますけど?」

「あ、ああ、大丈夫さ!少し寒かったただだよ!」

隠しきれなかった震えを麗日少女に見抜かれたが、轟少年の凍結が幸いしてそれ以上不審には思わなかったようだ。

再びモニターに目を戻せば戦闘自体は飛風少女の優勢で進んでいた。

…しかし、轟少年の動きが鈍いな。

彼の個性の範囲と出力ならあの部屋どころかあの階層ごと氷で埋めることだって可能なはずだろうに、それもしいとは。

おそらくは個性のデメリットによる体温低下が原因だろう。

よく見れば右半身に霜が降り、僅かだが体の震えも見える。

…だが、それも炎の個性ひだりがわを使えば軽減するはず。

なぜ轟少年はそれをしない?

「お!障子の奴も動き出したぜ!」

む!?

切島少年の声に思考の渦から引き戻される。

うっかり思考に没頭してしまっていたようだ。

今は授業中だ。しっかりと見ていなければ。

轟少年と飛風少女の映るモニターから別のモニターに視線を移せば、障子少年が裏口からビルに侵入して上層を目指しているところ

だった。

通信した様子がないことから、自らの個性で相方が戦闘中であることを察して別方向から核を目指したのか。

轟少年の加勢ではなく自らも核を目指すのはいい判断だ。

障子少年の個性は戦闘では応用しづらいうえに、轟少年の個性は出力を上げれば味方をも巻き込んでしまう。

だが、少し遅かったようだ。

「ケロ？障子ちゃんの動きが止まったわ」

「何やってんだ障子の奴？さっさと核のある部屋を目指せばいいのによ」

「上鳴少年。障子少年の見ている扉をよく見てみるんだ」

「扉を——って、ドアノブがない!？」

「よく見るとドアも壁と溶接されてる!？」

上鳴少年に続いて峰田少年が異常に気づいて声を上げた。

そう、障子少年が移動しているルートは芦戸少女によって一つを除いて封鎖されている。

そして残った一つのルートには当然

「待ちくたびれたよ、ヒーロー!」

「…芦戸」

サイン

敵が待ち構えているって訳さ!

「芦戸君の個性は酸だったはず。障子君は迂闊に近寄れないな」

「けど障子のパワーも侮れねえし、芦戸も安易な接近はしないか」

飯田少年と瀬呂少年の言う通り、今向き合っている両者にとって考えなしの接近は悪手だ。

だが、にらみ合っているのも時間制限のあるヒーロー側には不利に働いてしまう。

さあ、どうする障子少年。

「あれ？飛風が引いた？」

「有利に戦えてたと思ったんだが、どうしてだ？」

むっ。

どうやら飛風少女たちの方にも新たな動きがあったようだ。

再び視線を戻せば、轟少年と戦っていたはずの飛風少女が戦闘を離脱したところか。

『三奈ちゃん。今大丈夫？』

『…今、障子と睨み合ってるところ』

『そっか、じゃあそのまま聞いて。轟君と戦って分かったけど、多分轟君は持久戦に弱い』

どうやら飛風少女が轟少年のデメリットを見破ったようだ。

そしてそのまま時間制限まで粘る作戦に切り替えたか。

戦闘中でも相手の違和感を捉える洞察力と、すぐに作戦を切り替える判断力。

速さを重視する戦い方をしている故か、飛風少女は同世代と比較するとこの二つが飛び抜けているな。

「残り時間も少なくなってきましたわね」

「…終焉の時は近いか」

「見て、障子ちゃんが動いたわ」

残り時間も少なくなり、意を決して障子少年が芦戸少女へ突撃を仕掛けた。

芦戸少女も手に酸を溜めてそれを投げつけるが、障子少年は個性で複製した腕を盾にして前に進む。

「正面からかよ！ 漢らしいぜ！」

酸によるダメージを受けながらも怯まずに前に進み、障子少年は腕を伸ばす。

しかし、あと少しで手が届くというところで芦戸少女が身を反らして避けた。

障子少年は次々と腕を伸ばして芦戸少女を捕獲しようとするが、芦戸少女は素早く柔らかな動きでそれを避ける。

「轟くんと空音ちゃんもやり始めたよ！」

芦戸少女の動きに感心していると、再び轟少年と飛風少女の戦闘が始まったらしい。

しかし、内容は先ほどと違い轟少年が優勢だ。

時間を空けて体温が多少戻ったのだろう。
最初の戦闘より氷の勢いが強い。

飛風少女も負けじと個性を使って飛び回り始めるが、轟少年の目が動揺していない。

…何かを狙っているな。

そして、轟少年の狙いはすぐに分かった。

飛風少女を誘導し、挟み込むように氷壁を作りつて逃げ道を塞いだのか！

「轟がついに飛風を追い詰めたぜ！」

轟少年が止めの宣言とともに氷を作り出す。

だが、飛風少女はそれを正面から蹴りで迎撃した。

「蹴りであの氷を砕いた!?!」

「飛風さん、正面からの戦闘も出来たんだ！」

「でも、このままじゃ時間の問題ですわ」

確かに八百万少女の言う通り、このままいけば轟少年の勝ちだろう。

…だが、

「ああ!?!飛風さんが氷に捕まった！」

「轟の勝ちだ！」

轟少年の方も時間の問題があったようだね。

「タイムアップ時間切れだ! 敵 サイランチームWIN！」

『ヤッターアアアアア！』

さて！講評の時間と行くか！



ふう〜。

初日から充実した訓練だったあ。

あのアタシたちの訓練後、簡単な講評を受けて他の組の訓練に移った。

あ、講評ではアタシがMVPをもらえたよ！

なんでも、作戦の切り替えとその判断の速さが良かったってさ！
他の組の訓練も無事に終わり、今日の授業は無事に終了。

今は教室にみんなが集まってさっきの授業の反省会中。

ただ、轟君や尾白君は用事があって不参加みたい。

それに爆豪君も誘ったけど黙って帰っちゃった。

訓練終わってからずっと沈んだ様子だったし、どうしたんだろ？

まあ、幼馴染だつて言う緑谷君が後から追いかけて行つたし大丈夫かな。

「それにしても緑谷と爆豪の勝負も熱かったけど、飛風と轟も熱かったよな！」

「そうそう、作戦もパパッと決めちゃうし私すごく助かつちゃった！」

そんな考え事をしていると、切島君と三奈ちゃんが興奮した様子で詰め寄ってきた。

「そ、そんなことないって。褒めすぎだよ」

「そんなご謙遜を。あの轟さんとも互角に戦っていたじゃありませんか」

「そうよ。作戦の切り替えも早いし、動きにも迷いがなかったわ。まるでプロの動きみたいだったもの」

百ちゃんと梅雨ちゃんにもそう言われ、なんだか気恥ずかしくなる。

「確かに俺もそう思った。なんつーか迷いがないうって言うか、決断が速いって言うか」

「まあね。その辺はおじいちゃんに鍛えられたから」

瀬呂君の疑問にちよつとどや顔で答える。

おじいちゃんにも及第点もらってるポイントだからね！

「空音のおじいちゃん？」

「うん。アタシのおじいちゃんプロヒーローなんだ」

「「プロヒーロー！」」

プロヒーローの言葉にみんなが反応する。

「なんてヒーロー名なの？」

「グラントリノって言うんだ」

「グラントリノ?」

「うーん、ウチは聞いたことないな」

おじいちゃんの名前を聞いてもみんな首を傾げるだけ。

まあ、地元でも知ってる人なんてほとんどいなかったからね。

「今は半ば引退してるような感じだよ。ヒーロー活動もほとんどしてないしね」

おじいちゃん、元気かなあ?

あんまり感じさせないけどもう結構高齢だし、ちよつと心配だよ。

今日の夜にでも電話か、もしくは手紙でも書こうか——あつ!?!
「忘れてた!」

「ど、どうしたの空音?」

いきなり声を上げたアタシに三奈ちゃんが驚きながらも訊ねてくる。

「おじいちゃんに頼まれごとされてたの忘れてたや」

いやー。すっかり忘れてた。

おじいちゃんからオールマイトに手紙預かってたんだ。

カバンの中に手紙入れといてよかったよ。

「頼まれごとって?」

「雄英高校にいる知り合いに手紙を届けてくれて頼まれちゃってさ。ちよつと職員室行ってくるね」

オールマイトについて言ったらひと騒動起きそうだから黙っておこう。

さて、ちよつちやとお使いを済ませますか。

「失礼しまーす」

「ん? 飛風か、職員室に何の用だ?」

職員室に入ると、相澤先生がデスクで作業をしていた。

「あの、オールマイト先生は居ますか?」

「:いや、今は所用で席を外している。オールマイトさんに用事があったのか?」

「はい。えっと、アタシの祖父なんですけど、グラントリノってヒーローからオールマイト先生に手紙を預かって」

「ゴフウツ!？」

「わああ!？」

な、何事!？」

アタシが職員室に来た目的を話すと、奥のデスクにいた金髪の痩せた男性職員がいきなり吐血をしてむせ始めた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「あ、ああ。ちよつとトマトジュースをこぼしちゃっただけさ」

「トマトジュース!？」

慌てて駆け寄ろうとするが、その人に手で制される。

というか、トマトジュースだったのか。

骸骨みたいな外見だから本当に血を吐いたのかと焦っちゃったよ。

「飛風」

「ああ、はい。それでこの手紙を渡すように祖父から頼まれてまして」
何故だか呆れ顔の相澤先生に促され、話の続きを進める。

「話は分かった。良ければ俺からオールナイトさんに渡しておくが?」

「あく。じゃあ、よろしくお願いします」

「ああ。用が済んだならさっさと戻れ。下校時刻も忘れるなよ」

「はい。失礼しました」

ふう。吐血かと思ったときはびっくりしたけど、おじいちゃんのお使いは無事に完了。

教室に戻って反省会の続きをしよう。

：そう言えば、雄英の職員室にいたってことはあの骸骨みたいな人もプロヒーローってことだよな？

あんな人見たことないけど、どんなヒーローなんだろう？

緑谷君がヒーローに詳しいみたいだし、今度聞いてみよう。

その後、その人のことを聞いてみたら盛大に挙動不審になる緑谷君を見ることになるのは少し後の話だった。



「…オールマイトさん、飛風はもう行きましたよ」

「す、すまないね相澤君。ありがとう」

呆れた眼差しを向ける相澤君に、口元の血を拭きながら感謝を述べる。

「気を付けてくださいよ。その姿は生徒に知られていいもんじゃない」

「…分かっているとも」

今の私の姿は多くの人が知るオールマイトとはかけ離れている。

頬は痩せこけ、手足も小枝のように細く成り下がった。

私がこんな姿になっているのは訳があるのだが、ここでは割愛させてもらおう。

「それでグラントリノというのはお知合いですか？」

「あ、ああ。私の昔の恩師だよ。当時は色々とお世話になってね」

「…なんでそんなに震えているんです？」

「これは、その、トラウマというか、過去の酸っぱい記憶のせいというか」

ううっ、思い出しただけで震えがっ！

予想はしていたが、やはり飛風少女がお孫さんだったとは！

「まあ何でもいいですが、はいどうぞ」

「ああ、ありがとう。ちょっと席を外させてもらおうよ」

相澤君から手紙を受け取り、仮眠室へ移動する。

ああ、怖えよ。

いったいどんな内容が書かれているんだ…。

仮眠室のソファに腰を下ろし、戦々恐々としながら手紙を開くとそこには

『これ読んだら連絡よこせ』

たった一言だけ書かれていた。

…どうやら直接話を聞きたいようだ。

手紙を見なかったことにするという選択肢はない。

少なくとも数日中には飛風少女からグラントリノへ私に手紙を渡したということが伝わってしまうはずだ。

もし、それが伝わるまでに連絡をしなかったとしたら。

ううっ、想像するだけで無いはずの胃が痛い…。

そのまま震える手で携帯を取り出し、数少ない登録されている電話帳の中からグラントリノの名前をコールする。

『おう！俺だ！』

「ご、ご無沙汰しております。オールマイトです」

『おお、俊典か！つてことはあいつは無事に手紙を届けられたんだな』

「え、ええ。まさかお孫さんだと知ったときは驚きましたよ」

『なんだ、気づいていなかったのか？』

「戦い方や個性で疑ってはいましたが、ご親族の方がいるとは聞いていなかったものですから」

『…あんな時代だ。身近な者からは意図的に離れてたんだよ。俺も志村もな』

「……………」

…お師匠。

『まあ、今はその話はいいだろう。本題はお前だ。雄英で教師をやるってことは空音から聞いた。ようやく後継者を決める気になったか？』

「い、いえ、その、あの…」

『なんだ歯切れが悪いな。まあ、候補が見つかったなら俺にも教えろよ。あとナイトアイの小僧にもな』

ま、マズいっ！

実はもう後継を決めてワン・フォー・オールの譲渡まで済ませたとは、とてもじゃないと言える流れではないぞ…。

だが、言わなくてはっ！

「ぐ、グラントリノ！」

『ん？なんだ？』

「じ、実はですね。後継者なんですけど、もう既に決めておりました『はあ!?!もう決めてるだあ!?!』」

電話から驚きと怒りの混じった大声が聞こえ、思わず身を固くする。

「は、はい。連絡なく、後継を決めたことは申し訳なく思っております」

『…はあ、頑固なお前のことだ。もう何言っても変える気はないんだろ?』

「ええ。私は彼しか居ないと思っています」

『平和バカのお前が認めただ。人格や性質については問題ないだろうよ。そいつの名前は?』

「緑谷出久です」

『緑谷か。雄英生なんだろう、体は出来上がってんのか?』

「いえ、まだ完全に使いこなす程ではなく」

『…使いこなすだ? 俊典、その言い草まさかお前』

「あ!?!いい、いえ、そのですね」

失言をしたと思いつたときにはすでに遅く、電話からは冷え切ったグラントリノの声が聞こえてきた。

『俊典』

「は、ハイ!?!」

『全部話せ』

「…はい」

そして私はすべて話した。

緑谷少年との出会い、見出した彼のヒーロー性、そして個性をすでに譲渡していることも。

『…無個性だった小僧か。俊典、まさかとは思うが自分と重ねて同情してる訳じゃねえよな』

「…自分と重ねて見たことがない、と言ったら嘘になります。ですが、決して同情や憐れみから彼を後継と選んだわけではございません。彼ならば平和の象徴を継ぐに足ると思っただからです」

『…雄英は職場体験があったよな?』

「は、はあ。体育祭の後にありますが」

急に変わった話題に戸惑いながらも返事をする。

『そこでその小僧を俺が指名する。体育祭も見てやるから不甲斐ない結果だったらゲロ吐くまで扱いてやるからな。その小僧にも話を通しておけよ』

「み、認めていただけののですか？」

『認めるも何も、そもそも後継を決めるのはお前だ。そのお前が決めたら俺からはとやかく言わねえよ』

「あ、ありがとうございます！」

『まあ、一言相談ぐらいは欲しかったがな！』

「そ、それについては申し訳ございません…」

『ふん。まあ、そういう事だ。職場体験まではしっかりお前が面倒見とけよ』

「はい、それはもちろん」

『分かってんなら良い。じゃあな』

そう言ってグラントリノとの電話は切れた。

「…ふうふうふう」

肺に溜まった空気をすべて出すように息を吐き、ソファに深くもたれかかる。

恩師との久しぶりの会話に柄にもなく緊張していたようだ。

だが、収穫は多々あった。

緑谷^{後継者}少年を認めてもらえたこと。

そして、彼を鍛えてもらえること。

緑谷少年本人の承諾を取っていないが、そこは大丈夫だろう。

問題があるとすれば、グラントリノの特訓を受けて無事でいられるかだ。

あの方の特訓は限界ギリギリの少し先を巧みに突いてくるからな。

何度私も吐かされたものか…。

ま、まあ良い経験にはなるだろう！

私は湧き上がる懸念を無理やり抑え、慣れない事務仕事に精を出すため職員室に戻って行った。

4：USSJ強襲

マスコミが雄英の敷地内まで押し寄せたという騒動が起きた翌日の午後。

授業の開始を知らせるチャイムと同時に相澤先生が教室に入ってくる。

「本日のヒーロー基礎学だが俺とオールマイト、それからもう一人で見ることになった」

「見ることになった？」

相澤先生の言い方を考えると、教員の変更でもあったのかな？

「今日はなにするんですか？」

「災害水難なんでもござれ。人命救助訓練だ」

瀬呂君の質問に相澤先生が『RESCUE』と書かれたプレート掲げる。

オールマイトの時は『BATTLE』って書かれてたけど、あれって何種類もあるのかな。

「レスキューかあ…。今回も大変そうだな」

「だよー」

救助訓練と聞いて上鳴君と三奈ちゃんが渋い表情をする。

二人の個性だと戦闘は兎も角、救助には応用し辛そうだもんね。

「バカおめー救助こそヒーローの本分だぜ！」

「ケロ、水難なら私の独壇場よ」

渋い表情の二人とは正反対に切島君と梅雨ちゃんはやる気満々といった風だ。

「おい、まだ話の途中だ」

そんな風に授業に向けて気が逸る生徒たちも相澤先生の僅かに怒気を含んだ声で直ぐに沈黙した。

「今回の訓練ではコスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗って行く。以上、準備開始」



「コスチューム着なくても良いなんて言われたけど、皆着替えてるね」
コスチュームに着替え、バスの待つ場所へ移動している最中に周りを
見ながら三奈ちゃんがそう言った。

「実際にヒーロー活動する時はコスチューム着てるからね。コス
チュームの所為で救助活動が出来ませんじゃ話にならないもん」
「まあ、そうだよね」

ただ、前を歩く緑谷君だけは体操服を着ている。

「どうやら先日の戦闘訓練で破損したコスチュームの修復がまだ終
わっていないみたい。」

「バスにスムーズに座れるように番号順に二列で並ぼう！」

バスの前に辿り着くと、昨日学級委員長に任命された飯田君がどこ
から取り出したか分からないホイッスルを吹きながら皆を整列させ
ようと大きな声を張り上げる。

けど、

「こういうタイプだったのか！」

「イミなかったねー」

「どうやら飯田君の想定していたタイプと違ったようで各自好きな
ように席に座る。」

因みにアタシは三奈ちゃんの隣に座った。

「私思った事を何でも言っちゃうの緑谷ちゃん」

「え!? な、なにかな蛙吹さん」

「梅雨ちゃんと呼んで」

三奈ちゃんと他愛も無い話をしてると、向かい側にいた梅雨ちゃん
と緑谷君の会話が聞こえてきた。

「あなたの個性、オールマイトに似てるわ」

「へ!? そこそ、ソウカナ!?!」

梅雨ちゃんの一言に何故か過剰に反応した緑谷君にみんなの視線
が集まる。

「待てよ梅雨ちゃん。オールマイトは個性を使ってもケガしねえぞ？」

似て非なるアレだぜ」

「そそ、そうだよ。ぼ、僕なんか全然、オールマイトと比べるのも烏澁がましいって言うか」

「しかし、シンプルな増強系は良いよな。派手だし出来ることが多いてよ。俺の『硬化』は対人には強いけど、如何せん地味なんだよな」

「そ、そんなことないよ。十分プロでも通用する個性だと思うよ」
「プロな―でもやっぱプロも人気商売みてえなところはあるぜ!」

切島君と緑谷君のそんな会話から話題は自分の個性へと移っていく。

「うちのクラスで派手で強いつて言ったら、やっぱ爆豪と轟か?」

「でも爆豪ちゃんはキレてばかりだから人気でなさそう」

「んだとコラ!? 人気ぐれーだすわ!」

「ホラ」

「強いつて言ったら飛風もだよな」

「え、アタシ?」

梅雨ちゃんと怒鳴る爆豪君の会話(と言っているのか分からないけど)を聞き流していると、切島君が急にアタシにも会話を振ってきた。
「戦闘訓練じゃあんなに凄かったじゃねえか。プロヒーローのお祖父さんに小さいころから鍛えてもらってたんだろ?」

「そ、そうなの!?!」

切島君の言葉に返事をする前に緑谷君が大きな声で食いついてきた。
「そ、そうだけど?」

「すごいよ身内にヒーローが居るなんて!なんてヒーロー名なの!?! あ、そうか! 飛風さんが凄い個性を使い慣れてるって感じたのはお祖父さんに訓練を見てもらえたからなのか。公共の場での個性使用は禁止されてるからどうやって鍛えたんだろって不思議だったんだけど、プロの資格を持っているお祖父さんに見てもらえたなら納得だ。もしかしてお祖父さんも同じような個性なのかな? それならあの熟練のヒーローみたいなの戦い方も納得だぞぶつぶつぶつ」

ええ…。

おじいちゃんの話に物凄く食いついてきたと思ったら、急に独り言を呟き始めたんだけど…。

周りに視線を巡らせても他の皆もアタシと同じように若干引いてる。

「緑谷ちゃん。空音ちゃんが困ってるわ」

「ぶつぶつぶつ——はっ!?ご、ごめん。ヒーローの事となると、つい…」

「い、いや、少しびっくりしたけど大丈夫だよ?」

梅雨ちゃんに声を掛けられ正気に戻った緑谷君は恥ずかしさから顔を真っ赤にして頭を下げてくる。

「おい、静かにしろ。もうすぐ到着するぞ」

「二「はい!」」

相澤先生の鶴の一声で騒がしかったバス内も静かになる。

あの爆豪君ですら静かにするのだから初日の除籍勧告がやっぱり効いてるのかな。

数分後に目的地に着いてバスから降りると、まるでテーマパークのような広場が見えた。

「すげー!・USJかよ!?!」

この光景に上鳴君が興奮したように叫ぶ。

「水難事故、土砂災害、火事。あらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場です」

そんなことを言いながら現れたのは宇宙服のようなコスチュームを纏った教師だ。

「その名もウソの災害や事故ルーム」

(((本当にUSJだった!!)))

なんか初めてクラス全員の意見が一致した気がする…。

「スペースヒーローの13号だ!災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒーロー!」

「わたしファンなんだ!13号の!」

アタシが取り留めのないことを考えていると、緑谷君が先生のことを説明しそれに追従するようにお茶子ちゃんもテンションを上げる。

「えー、授業を始める前に皆さんにお小言を一つ、二つ、三つ、四つ…」
おおう…。どんどん増えていくね。

お小言はおじいちゃんので十分なんだけどなあ。
「皆さんご存知だと思いますが、僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んで塵にしています」

「その個性でどんな災害からも人々を救出するんですよ！」
「…ええ」

緑谷君の言葉に13号先生は一息の間を開けてから重々しい雰囲気
気で口を開いた。

「しかし、簡単に人を殺せる個性です。皆さんの中にもそういった個性の方がいるでしょう」

「——ッ」

その一言に生徒たちの数人が息を飲む。

「昨今起きている殺人事件の約八割が個性を使用、または利用したものです。現在の法律で個性の使用は資格制にされ厳しく規制されることで成り立っているように見えますが、誰もが容易に人を殺せる行き過ぎた個性を持っていることを忘れないでください」

13号先生の語った内容はアタシがおじいちゃんに最初に教え込まれた事の一つだ。

おじいちゃんが活動していた内容は全くと言っていいほど話してくれないけど、その時代の話はよく教えてくれた。

オールマイトがデビューするより更に前の、個性を用いた犯罪率が二十パーセントを超えていた時代。

その罪を犯した人たちの殆どが「そんな事をする人」には見えなかったような人だったらしい。

『人は力を持つと誘惑に弱くなっちゃまう。ほんの些細なきっかけでそれに負けちまう。忘れるなよ。力を持つこと、それを振るうことの責任をな』

おじいちゃんに口を酸っぱくして言われた事の一つ。

大丈夫、アタシはしっかりと覚えてるよ。

「相澤さんの体力テストで自分の力を知り、オールマイトの戦闘訓練

でその力を人に向ける危険性を体験したと思います。この授業では人命のために個性をどう活用するか、それを学んでいきましょう」

USJを見て浮かれていた生徒たちも全員が先生の話を真剣に聞き入っている。

「君たちの力は人を傷つけるためではなく、人を救うためにあるのだと心得て帰ってください。以上、ご清聴ありがとうございました」

「ブラーボー！ブラボー！」

「ステキー！」

閉めの言葉と共に飯田君とお茶子ちゃんが歓声を上げ、アタシたちは拍手を送る。

「話は終わったな。それじゃ早速——」

13号先生の話が終わった頃合いを見て相澤先生が授業を始めようとした時、その視線が広場の噴水前に固定された。

あれは…黒い霧？

「全員一かたまりになって動くな!!」

「…え？」

「13号！生徒を守れ！」

先生の怒号に呆気にとられていると広場にあつた霧はだんだんと大きくなり、そこから体中に手のようなオブジェを付けた気味の悪い男を先頭に大勢のガラの悪い人たちが現れ始める。

「何だありや？入試みたいにもう始まってってパターンか？」

「動くな！あれは——サイラン 敵だ！」

困惑したように呟く切島君に相澤先生はきつぱりと言い放つ。

「13号にイレイザーヘッドですか。先日頂いたカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなんですが」

「やはり先日のマスコミはクソ共の仕業か」

黒い霧の男が丁寧な言葉遣いで言った台詞に相澤先生が忌々しそうに呟く。

「オールマイトは何処に居んだよ。せつかくこんな大衆連れて来たのに」

体中に手のオブジェを付けた男は面倒くさそうにボソボソと何か

を言うと、顔を上げてアタシたち生徒に視線を向けた。

「…子供を殺せば出てくるかな？」

ヤバいやバいやバいやバいや。

一瞬、あの男と目が合ったけどまるで背筋に氷柱を差し込まれたような悪寒が背筋に走った。

あの男は笑って人を殺せる、人を殺しても何も感じない、そういう類の人間だ。

反射的にその男と距離を取ろうと足が半歩後ろに下がった時、相澤先生がアタシたちとその男の間に割って入り視線を遮った。

「13号避難開始！学校へ電話を試せ！センサーの対策も頭にある敵だ。電波系の個性持ちが妨害している可能性もある。上鳴、お前も個性で連絡を試せ。俺は殿を務める」

「う、ウツス！」

「先生！一人で戦うんですか!？」

ゴーグルを装着し、首に巻いていた捕縛武器を緩める相澤先生に緑谷君が驚いて声を上げる。

「いくら個性を消してもあの人数相手じゃ。それにイレイザーヘッドの戦闘方法は個性を消してからの奇襲捕縛だ。正面戦闘は——」

「一芸だけじゃヒーローは務まらない。13号、生徒たちを頼むぞ」

相澤先生はそう言うと、階段を一気に飛び降りた。

「おいおい、誰だあいつ？」

「知らねえよ！だが、一人でこの数に突っ込んでくるなんてよ！」

「大マヌケ野郎だぜ！」

階段下に並んだ敵たち^{サイラン}が相澤先生を嘲笑いながら両手を突き出す。おそらく、遠距離攻撃できる個性なんだろう。

けど——

「出な——ガバツ!？」

「な、なんで——ぐぎゃつ!？」

個性を消されて混乱している内に捕縛武器で絡め捕られ、頭を打ち付け合って呆気なく意識を飛ばした。

「馬鹿野郎！あいつは見ただけで個性を消すイレイザーヘッドだ！」

「個性を消すう？俺みたいな異形型のも消してくれんのかよ!?」

周りの敵を押しつけて前に出てきたのは岩石のようなもので首から腰までを覆った四本腕の敵だ。

その男は大きく腕を振りかぶりながら相澤先生へ肉薄し、その腕を振り下ろす。

「いや、無理だ」

けど相澤先生は冷静にその拳をかわし、防御の薄い顔面へカウンターで拳を入れた。

「消せるのは発動系や変形系に限る。——が」
カウンターにより大きく仰け反った男の足に捕縛武器を巻き付ける。

「お前らみたいな異形型の個性は統計的に近接格闘で発揮されることが多い」

巻き付けた捕縛武器の反対側を一本背負いのように引っ張り、相澤先生は自分よりも大きい男を投げ飛ばした。

「だから、その辺の対策はしている」

飛ばされた男は他の敵たちが密集している箇所に投げ込まれ、周りを巻き込みながら派手に地面に落ちた。

す、すごい。

ゴーグルで目線を隠して、誰の個性を消してるか分かりづらくして相手の連携をかき乱してるのか。

「すごい、多対一こそ先生の得意分野だったんだ」

アタシが先生の動きに見入っていると、隣で緑谷君が感心したように呟いたのが耳に入った。

って、違う！今は呆然と見てる場合じゃなかった！

「空音！何やってんの!?!」

「緑谷くん！早く避難を！」

「ご、ごめん！行こう、緑谷君！」

「う、うん！」

三奈ちゃんと飯田君に急かされ、止まっていた足を動かす。

「やせませんよ」

「っ!？」

避難していた皆に追いついた瞬間、アタシたちとゲートの間を塞ぐように黒い霧の敵サイランがいきなり現れた。

「初めまして。我々は敵サイラン連合。僭越ながらこの度、雄英高校に入らせていただいたのは——平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

…オールマイトを殺す？

それがこいつらの目的なの？

「まあ、目的のオールマイトが居ないのは誤算でしたが、私のやることは変わりません」

黒い霧の男がそう言うのと、その体の霧を大きく広げ始めた。

「オラア！」

「死ねえ！」

先手必勝という事だったんだろう。

相手がおかする前に戦闘不能にしようと、切島君と爆豪君が霧の男に攻撃を仕掛けた。

「危ない危ない。生徒と言えど、優秀な金の卵でしたね」

「ダメだ！二人とも退きなさい！」

けど、その攻撃は相手に効かず剩13号先生え最高戦力の攻撃射線を塞いでしまふという最悪な結果をもたらしてしまった。

「だが、所詮は卵。散らして、殺す」

男の宣言と共に体の霧が爆発的に広がり、アタシたちに覆い被さるうと迫ってくる。

「三奈ちゃん！」

「空音!？」

咄嗟に隣にいた三奈ちゃんを掴んで個性を使って霧の届かない上空に跳び上がる。

上空から見下ろすと飯田君や障子君が近くにいたクラスメイトと共に霧の範囲外に逃げ出せたのが見えたが、クラスの半数以上が黒い霧に飲まれてしまっていた。

「そ、空音！皆が!？」

「三奈ちゃん、今は落ち着いて。まだ敵が目の前にいる」

黒い靄に飲まれたクラスメイトを見て悲鳴を上げる三奈ちゃんに冷静になる様に言い聞かせる。

靄が引いたのを確認して着地すると、そこにいたはずのクラスメイトは半分以下の人数に減っていた。

「飛風くん！ 芦戸くん！ 無事だったか！」

「飯田君！ 他の皆は!？」

「障子くん！ 居場所は分かるか!？」

「…散り散りになってはいるが、全員施設内に居る」
「やられたっ！」

多分、皆の飛ばされた先には敵が配置サイランされてるはず。

轟君や爆豪君ならともかく、個性の調整が出来ない緑谷君や戦闘能力の低い透ちゃんが囲まれてしまったら為す術が無い。

「…散らし損ねが思ったより居ましたが、まあ良いでしょう。残った卵たちはじっくりと調理するのでしょうか」

余りにも早い本物の悪意にアタシたちはただ身を固くするのであった。

5：USSJ強襲（2）

「ん、13号君にも相澤君にも繋がらない」

授業の進捗などを確認しようと、現在一年A組の救助訓練を見ているはずの教員に電話を掛けるが繋がらないとは…。

「…いかなる理由であれ、勤務時間外の都合で教鞭を放り出してしまふとは。終わりがけに行つて何を語れよう。多少の無理をすれば後十五分ほどは体も持つだろう」

人々を助けたことに悔いなどないが、そのせいで教職の方が疎かになつては生徒たちに申し訳ない。

うむ。やはり、行くべきか！

そうと決まれば――

「私が、行く！」

おっと、力みすぎて血が…。

「待ちなよ」

「校長先生！」

「YES！ネズミなのか犬なのか熊なのか、隠してその正体は…：校長さー！」

休んでいたソファから立ち上がりUSSJに向けて移動しようとしたとき、仮眠室のドアを開けて校長が現れた。

「本日も大変整った毛並みで」

「フフフ。秘訣はケラチンさ。人間にこの色艶は出せやしないのさ」

「なるほど。それで、私に何の御用で？」

先生と視線を合わせるように屈みながら私を訪ねてきた理由を問うと、先生は一つのタブレットを取り出してこちらに画面を向けてきた。

「コレさコレ！」

先生の差し出したタブレットには『オールマイトわずか一時間で事件を三件解決！』と題されたニュース記事が表示されている。

「君が来たというのに未だこの街で罪を犯す輩も大概だが、事件と聞けば反射的に動く君も君さ。そういうところは昔から本当に変わら

ないね」

そう言つてため息を吐く先生。

「ケガと後遺症によるヒーロー活動の限界。それに伴う緑谷^後出久^者の育成。平和の象徴に固執する君がこの両者を社会に悟らせず動けるのはここしかないだろうと勧めた教職だぜ？もう少し、この街のヒーローを信頼して腰を落ち着けても良いんじゃないのかな？」

先生の言葉に話が長くなることを感じた私はマツスルフォームからトウルーフォームへ戻る。

「もちろん犯罪を見逃せと言っているわけではないよ。しかし、勧めたこちらとしては引き受けてもらった以上は教職を優先してほしいのさ。この街にもヒーロー事務所はたくさんあるわけだしね」

「お、仰る通りです。ですから、こうしてUSJに向かおうとですね…」

「今行つてもすぐに戻るハメになるんだろ？それならばここで私の教師論を聞いて今後の糧にしたまえよ」

むむむつ。

先生がお茶を入れ始めたということは本格的に長話になつてしまふな。

相澤君たちが電話に出ないのでなく、電話が繋がらないというのが気にはなるが…。

「先ずはヒーローと教師という関係の脆弱性と負担についてだが」

「…先生もお変わりありませんね」



USJに突如として現れた敵^{サイラン}。

その内の一人の個性により、大半の生徒がUSJ内にバラバラに移動させられてしまった。

「物理攻撃無効でワープって最悪だぜっ」

男の靄から逃れていた瀬呂君が堪らずといった風に悪態をつく。

「…委員長！」

「は、はい！」

「君に託します。校舎まで駆けてこの事を他の教員に知らせてください」

13号先生の言葉に飯田君が目を見開いて驚く。

「警報は鳴らずに電話も圏外になっていました。先輩、イレイザーヘッドが下で個性を消し回っているにも拘わらずに改善されないということは、センサー類を無効化できる個性を持った者を即座に隠したのでしょうか。ならば、それを見つけ出すよりも君が駆けた方が早い！」

「し、しかし！他の皆を置いていくなど！」

「行けよ委員長！」

13号先生にそう言われても渋る飯田君の背を砂藤君が力強く押した。

「外に出れば警報がある！だからこいつらは此処の中だけで事を起こしてるんだろ！」

「お前の脚なら外まで行ければ追いつけねえ！あの靄を振り切って行け！」

「行つて飯田君！長距離なら飯田君が一番早い！今こそ救うために個性を使う時だよ！」

「っ！」

砂藤君、瀬呂君、アタシの後押しで飯田君の表情が覚悟を決めたものに変わる。

「手段がないとはいえ、敵前で策を語る阿呆が居ますか」

「バレても問題ないから語つたんでしようが！」

救援を呼びに行くのを阻止しようと男が靄を広げると同時に、13号先生がブラックホールを発生させてその靄を吸い込むために個性を発動させた。

「うおおおおおっ!!」

「…標的はあくまでオールマイトただ一人。他の教師に出てこられてはこちらも大変ですのぞ」

外に繋がる扉とアタシ達の間陣取る男を迂回するように飯田君

が走り出す。男は靄を広げてそれを阻止しようと動く。

「させない！」

「…やはり生徒を庇おうとしますか」

これはマズいっ！

13号先生の背後に黒い靄が見えた瞬間、アタシは駆けだした。

「ッ!？」

「13号、災害救助で活躍するヒーロー。やはり、戦闘経験では他のヒーローに半歩劣る。更には生徒たちを守るこの状況、貴方の行動は殊更予測しやすい」

「先生！」

自身の放ったブラックホールを背後に転移され、背中から塵にされかけている13号先生を横から突き飛ばす。

「グ…アッ！」

「先生！大丈夫ですか!？」

「と、飛風さん…ですか。すみません…助かり、ました…」

息も絶え絶えな先生を見るとコスチュームの背面は塵にされ、露出した背中からは少なくとも出血が見られた。

まずは止血しなきゃ！

「とりあえずこれでっ」

アタシはコスチュームのマントを外し、13号先生の傷を塞ぐように巻き付ける。

「ほお、中々に動ける生徒もいるみたいですね。ですが、仕留め損ないましたが13号は行動不能。そして救援を呼ぼうとしている——」

靄の男はアタシの方をチラリと一瞥して先生が動けないのを確認すると、個性で自分自身をワープさせて出口に向かっていた飯田君の前に現れた。

「貴方を潰せば此処での仕事は完了です」

「ッ!？」

「飯田君!？」

既に勢いよく駆け出している飯田君は靄を躲すことも止まることもできず、万事休すかと思われたその時。

「行け、飯田！」

飯田君を飲み込もうとした靄を障子君が六本の腕を使い、抱き込むようにして飯田君を靄から守った。

「障子君!?!何を——」

「早く！」

「——すまないっ！」

絞り出すように吐き出された言葉と、眉間に深く刻まれた皺からは飯田君の葛藤の大きさを感じられる。

そんな決意と共にエンジンもギアが上がってきたのか、速度を上げながら出口まで後十メートル程の距離まで詰めることができた。

「行かせるか!?!このガキが！」

格下と侮っていた飯田君が予想外に捕まらないので苛ついたのか、靄の男の言葉遣いが丁寧なものから荒いものに変わる。

「消えろ！」

語気を荒く言い放つと共に再び飯田君に向けて靄を広げる。

だが飯田君への苛立ちが視界を狭め、背後から駆け寄ってきていたお茶子ちゃん存在に気が付かなかった。

「なっ!?!」

「理屈は知らんけど、こんなん着とるなら少なくとも実体があるってことじゃないかな……!」

お茶子ちゃんが靄の男の首周りを覆っている装甲のようなコスチュームに触れ、お茶子ちゃんの個性『無重力』が発動する。

「行つて飯田君！」

「身体を……っ。だがまだ——」

「させるか！」

靄の男が体を浮かされながらも靄を飯田君の方へ伸ばそうとしたが、その背に瀬呂君の射出したテープが貼り付けられ、さらに遠くへ引き離された。

「おおおおおっ!!」

そしてその隙に飯田君は出口の扉を潜り、USJの外に脱出することができた。

「…逃げられた。此処ゲームオーバーまでですわね」

靄の男はそう呟くと自身をワープさせて何処かに消えていく。

しばらく周りを警戒していたけど、再び現れる気配もないことから
どうやらどこかに撤退したみたい。

「ぐう…っ」

「先生！今は無理に動かないで！」

「先輩…イレイザー、ヘッドは…」

13号先生の言葉を聞いて階段下の広場に目をやれば、そこでは相澤先生が最初より大分数を減らした敵サイラン達と未だに大立ち回りを演じていた。

「す、すげえ。相澤先生ってあんなに強かったのか」

砂藤君が思わずと言った様子で呟く。

「これなら勝てるぜ！」

「うん！いけるよ！」

相澤先生の奮闘に瀬呂君や三奈ちゃんは安堵の表情を見せるが、アタシには一つ懸念があった。

あの主犯格の手のオブジェを付けた男が動きを見せていない…。

味方が続々とやられているのにも関わらず、その立ち姿からは苛立ちも怒りも無く余裕すら感じられる。

まだ見せていない、相澤先生を倒せる何かがあるって事？

「はあ…、流石はプロヒーローだな。有象無象じゃ、どうにもならないか」

そして、そんなアタシの予想は当たり

「やれ脳無」

怪物が動き出した。



「……………え？」

「う、嘘…だろ…」

さつきまで安堵の笑みを浮かべていた三奈ちゃんや瀬呂君が水を

打ったように静まり返った。

「あ、相澤先生!」

アタシ達の視線の先にはさつきまで敵サイラン相手に優勢に立ち回っていたはずの相澤先生が額から血を流して倒れている。

起きたのは一瞬の出来事だった。

あの脳みそを剥き出しにした黒い異形サイランの敵が動き出したと思ったら、いつの間にか相澤先生にその丸太のような腕を叩きつけていた。その速度たるや、おじいちゃんとの訓練で目が慣れていないはずのアタシでも目で捉えるのがやっとだった程だ。

相澤先生は何か反応して片腕でガードしたが、まるで紙切れのように吹き飛ばされた。

「な、なんで!? 相澤先生が個性消してたはずやろ!」

「疑問は後だ。今は相澤先生を助けに行くぞ」

「そ、そうだな! 行くぞ!」

取り乱すお茶子ちゃんを冷静に落ち着かせ、助けに行こうとする障子君と砂藤君。

「待って!」

「飛風?」

だけど、そんな蛮勇を許すわけにはいかない。

「相澤先生がやられるほどの敵サイランなんだよ!」

「しかし、このままでは相澤先生が!」

「ここで行かなくて何がヒーロー科だよ!」

飛び出そうとする二人のコスチュームを掴んで引き留めると、二人からは非難の声が上がった。

でも言い方は悪くなっちゃうけど、このまま二人が行っても犬死するだけだ。

「このまま二人が行ってもやられるだけだよ! それ分からないわけじゃないでしょ!」

「だ、だがっ!」

「じゃあどうしろってんだよ!」

二人も先生プロヒーローがやられた相手との実力差は理解しているのか、悔し

げに顔を歪めながらも叫ぶ。

「…アタシが一人で行く」

「なっ!？」

「はあ!？」

「一人で行くって何言ってるんだよ!？」

「そうだよ空音!それに、行くなら一人じゃなくて全員で行けば——」

「それは駄目。あの敵のスピードとパワーどちらかに対応できなきや、人数がいても被害者を増やすだけになっちゃう」

全員で行くことを提案する三奈ちゃんの言葉をアタシは首を振って否定する。

「それに正面から戦うわけじゃない。アタシの個性で回避に徹すれば時間稼ぎくらいはできるはず。飯田君が外に出れた今、後少しでほかの先生、オールマイトが来てくれる。それまでだったら…」

「い、いけません飛風さん!先輩がやられるような相手にプロでもないあなたが一人でなんて!」

アタシの行こうとする意志が固いのを察してか、13号先生が無理を押し立て立ち上がるうとしていた。

「君たちは避難を、ここは僕が——っ」

「13号先生!」

だがやはり傷が痛むのか、うめき声とともに崩れ落ちかけた体を瀨呂君とお茶子ちゃんが支える。

そして、そうこう話しているうちに、倒れ伏す相澤先生に止めを刺そうと敵たちが距離を詰めるのが見えた。

「…すみません先生。アタシ行きます!」

「空音!」

相澤先生の元へ飛ぼうとした瞬間、三奈ちゃんから声を掛けられ、思わず足を止める。

「無事に戻って来るよね?」

不安な表情でそう言ってきた三奈ちゃんに、アタシは言葉ではなく精いっぱい笑顔で答えた。



「個性を消せる個性か…。すごい個性だがなんてことはないね。圧倒的なパワーの前じゃあ、無個性も同然なんだからさ」

「——グ——ッ：」

「プロヒーローも脳無にかかればこの程度か」

男はにやけた表情で地に伏せる相澤先生のことを嘲る。

「もういいか。潰せ、脳無」

男の言葉とともに脳無と呼ばれた敵がそのこぶしを振り下ろす。

確実に死に至らしめる威力を有したそれは、しかし誰の命も奪うこととはなかった。

「先生！無事ですか！」

なぜなら、アタシが間に合ったから。

「と、飛風!? なぜ来たんだ！今すぐ戻れ！」

「お説教は後日受けます！それと、手荒くなっちゃいますけど我慢してくださいね！」

「待て！止め——」

先生はまだ何か言いかけていたが、アタシはそれを遮って先生の体に瀬呂君のテープを貼り付ける。

「瀬呂君、お願い！」

「任せろ！砂藤！」

「応よ！」

アタシの合図で瀬呂君がテープを巻き取りつつ、砂藤君が引っ張り上げる。

とりあえずこれで先生は安全圏まで下がれたかな。

「何だ？ガキが出てきやがって。黒霧の奴は何やってんだよ」

「悪いけど、ここからは選手交代だよ」

「ああ？お前が脳無とやるってのか？」

男はアタシの言葉に不愉快そうに眉をひそめる。

そんな男にアタシはクスリと笑いをこぼした。

「…なに笑ってんだガキ？ 恐怖で頭がイカレたのかよ」

「いや、つい可笑しくてね。そのガキ相手でも仲間任せで自分は前に出ない。オールマイトを殺すなんて大口叩く割には、ずいぶんと臆病なんだなって思っちゃってさ」

「…どうやら死にたいらしいなクソガキ」

これでいい。

やけに簡単な挑発で乗ってきたけど、これでアイツの目はアタシに向く。

「望み通りに殺してやるよ！ 行け脳無！」

男の指示と同時に脳無が弾丸のような速度で迫り、拳を振り下ろす。

「フッ！」

けど極限まで集中していたアタシはその破壊の鉄槌をなんとか見切ることができた。

個性を使って跳んで攻撃を回避し、その勢いのままに首筋に蹴りを叩き込む。

大きく腕を振り切った無防備な体勢のところに叩き込んだ攻撃は大人ですら昏倒させる会心の一撃となるはずだったが、蹴りを入れた瞬間に返ってきた感触はまるで分厚いゴムを叩いたようなものだった。

「…なに今の？」

普段ならそのまま連撃につなげるところだけど、脳無の不気味さに一度大きく距離をとる。

あのスピードとパワーなら増強系の個性じゃないの？

けど、蹴りのインパクトの瞬間に感じた手ごたえは明らかに普通の肉体じゃなかった。

「無駄だ、脳無は『ショック吸収』の個性を持った対オールマイト用に作られた怪人。お前みたいながきがどう足掻こうと勝てる相手じゃないんだよ」

「…忠告どうも！」

再び迫る脳無の攻撃をかわしつつ、男に皮肉を返すがアタシの表情

は苦々しいものに変化する。

あの男の言葉が本当なら脳無に対しての有効打をアタシは持つていないことになる。

それに個性が『ショック吸収』ならあのパワーとスピードは素の身体能力。

：唯一の救いは脳無が素人つてところかな。

大振りの攻撃に見え見えの初動。

さらにコスチュームのブーツの機能で本来なら足の裏からしか噴出されない空気を足の側面からも出せるようにしたおかげで、空中で柔軟に軌道変更ができるようになってる。

それらの要素のおかげで何とか回避することだけはできている状況だ。

「：ちよこまかとハエみたいにうざったいガキだ。大した経験値も落とさない雑魚キャラのくせに」

「ハエねえ。そんなハエ一匹に手間取ってよくオールマイトを殺すなんて言えたね？」

「いちいち癪に障るガキだ：ツ。脳無！さっさと殺せ！」

男の苛立った怒声とともに脳無の攻撃がより激しくなる。

表面上は相手に悟らせまいと涼しい顔で回避に徹しているけど、アタシは内心の焦りを必死に抑えていた。

——このままだとあと数分ぐらいが限界かな。

アタシの個性は吸い込んだ空気を足の裏から噴出させるもの。

全力で運動して息が乱れれば当然、個性の出力も落ちてしまう。

もちろん十数分程度で息切れするような体力ではないつもりだけど、初めての実践と一撃の被弾も許さない攻撃がアタシの体力をゴリゴリと削っていく。

「死柄木 弔：」

「：黒霧、お前何やってたんだよ。ガキが一人こつちに来たぞ」

そんな時、男の隣に黒い霧が現れ黒霧と呼ばれた男がワープしてき

た。

お茶子ちゃんの個性の影響が見られないことから、アジトか拠点に戻って触れられた服を変えてきたのだろう。

「申し訳ありません。13号は行動不能にしたのですが、散らし損ねた生徒一人に外へ逃げられました」

「…は？———はあ。黒霧、お前がゲートじゃなかったら粉々にして殺してたよ」

そう言う男、死柄木は苛立ちのままに首を掻き巻く。

「何なんだよッ。大勢引き連れてきたのにボスは居ないし、避けるだけのガキ一人殺せない！」

「…死柄木 弔」

「……分かってるよ。さすがに何十人ものプロヒーロー相手じゃ敵わない。ゲームオーバーだ。…仕方ない、帰るか」

帰る？それに、ゲームオーバーって言ったの？

死柄木の言葉にアタシは思わず眉をひそめた。

最初に死柄木と目が合った時には思わず身を竦めそうになるほどの狂気のような物を感じたけど、簡単な挑発にすぐに乗るし癩癩を起したり、飽きたように帰ると言い出したりと今はまるで子供のように見える。

そんな思考に気を取られてしまったせいか、アタシは死柄木の次の行動に一瞬だけ対処が遅れてしまった。

「けども、その前に平和の象徴の矜持を少しでも———」

恐らく水難エリアから戻ってきた緑谷君たちへの攻撃という最悪の一手に対する対処が。

「へし折っていくか」

「しまっ———！」

黒霧のワープで死柄木が梅雨ちゃんの目の前に現れ、その手をゆっくりと伸ばす。

どんな個性か分からないけど、あんな殺害予告めいたことまで言ったからには殺傷能力の高い個性のはず。

指先ですら触らせちゃダメだ！

「梅雨ちゃん!」

アタシの速度ならギリギリ間に合う。

伸ばしている腕を弾いて――

「やっぱりそう来るよな。ヒーロー?」

「ッ!?!」

「やれ、脳無」

しまった!アタシを釣るための罠か!

死柄木の狙いに気付いた時にはもう遅く、脳無の拳が目の前まで迫っていた。

アタシは必死に足を前に向けて個性を使ってブレーキをかけるが、間に合うはずもなく。

そして、交通事故のような音が辺りに響いた。



「――え?」

僕はワープの個性を持つ敵に蛙吹さん、峰田君と共に水難エリアに飛ばされ、そこに待ち受けていた敵を退けて最初に居た広場へ戻ってきていた。

多数の敵を相手に優勢に立ち回っていた相澤先生が脳無と呼ばれた敵にやられ、それを助けに入った飛風さんと脳無の戦闘。

目まぐるしく変わる戦況、飛風さんと脳無の高速戦闘に僕たちは啞然と見守ることしかできなかった。

そして、逃げることもせず戦いを見ていた僕たちを助けようとした飛風さんが脳無に吹き飛ばされた。

「ハハハ! やつと死んだか、雑魚キャラのくせに梃子摺らせやがつて!」

「そ、空音ちゃん!」

「あ、ああああッ」

蛙吹さんと峰田君の悲痛な叫びでハッと意識を取り戻す。

「飛風さん!」

「イライラさせられたけど、結局脳無の前では——って、まだ生きてんのかよ」

まあ虫の息だけどな、と死柄木と呼ばれていた男が嘲るように言った視線の先には、小さいけれど苦痛に呻く声と僅かに身じろぎをする飛風さんの姿があった。

「まだ生きてるなら、確実に殺すか」

「や——」

簡単に、何てことないように殺すと言った死柄木の言葉に、僕の体は考えるよりも早く動いた。

「やめろおおおおッ！」

「脳無」

「SMASH!!」

右腕に個性を発動させて死柄木に向かって叩きつける。

パンチを繰り出した瞬間、慣れてしまったいつもの激痛が腕に走らないことに気が付いた。

——やった！個性が上手く制御できたんだ！

喜びを感じて笑みを浮かべたけど、その笑みは一瞬で凍り付く。

なぜなら、繰り出した拳の先にはいつの間にか脳無がいて、僕のパンチが全く効いていない様子だったからだ。

「いい動きするなあ。スマッシュってオールマイティのフォローかい？まあいいか、どうせ死ぬしな」

脳無の巨大な手が僕の右腕をつかみ、逆の腕が振り上げられた。

その時に自分の腰に何かがある、恐らく蛙吹さんの舌が巻き付いて後ろに引つ張られる感覚があったけど、もう間に合わない。

——やられるッ。

顔が引きつり、恐怖が全身を支配しかけたその時。

ドオンッ！と大きな音を立ててUSJのゲートが吹き飛んだ。

「もう大丈夫」

ゲートが吹き飛んだ衝撃で舞った土煙が晴れると、そこには敵味方の両方が待ち望んだヒーローが佇んでいた。

「私が来た！」

「オールマイトオ!!」
「あー……。コンテニユーだあ」